



Q&A
JICA
に聞きたい!

Q ハイチでも活動したJICA国際緊急援助隊。どのように派遣されているの?

海外で大規模な災害が起こったとき、被災者の救助や医療活動などを行うJICA国際緊急援助隊(JDR)。20万人以上が犠牲となったハイチ大地震にも医療チームが派遣され、多くの人々を診療した。



(上)診療の順番待ちをする人々。再診に訪れる患者が日増しに回復する姿は、医療チームにとって大きな心の励みとなった
(左)日中は40度近くにもなるテント内で診療する医療チーム

JICA国際緊急援助隊事務局
緊急援助課

渡邊 利一

PROFILE
大学卒業後、2008年4月にJICAに就職。ザンビア事務所を経て、09年4月より現職。主に救助チームの訓練や研修の企画、準備、運営、関係省庁との調整業務などを担当。



「緊急援助から復興支援まで、 継ぎ目なく被災地の人々を支えています」

救助チームは決定から24時間以内、医療チームは48時間以内に出発することになっています。今回も、現地の治安状況などを確認した日本政府が15日に医療チーム派遣を決定。これを受けてJDR事務局は、医療チームに登録している全国の医師や

1月13日にハイチで起きた大地震は、世界中を震撼させるほどの被害を出し、3カ月がたった今も多くの人々が避難生活や過酷な環境下での暮らしを余儀なくされています。また、津波という形で日本列島にも緊張が走ったチリの巨大地震でも、被害が拡大しています。こうした大規模な災害が海外で起きたとき、いち早く現地入りして被災者支援を行うのがJICA国際緊急援助隊(JDR)です。

JDRは、「救助チーム」、「医療チーム」、「専門家チーム」、「自衛隊部隊」から構成されています。被災国からの支援要請と日本政府による派遣決定を受け、災害の規模や種類に応じてどのチームを派遣するかを決め、準備を進めます。ハイチ大地震では、医師や看護師など医療チームのメンバー26人が派遣されました。

地震の発生を受け、翌14日、JICAは先遣隊を被災地に送り込み、被害の規模や治安状況、必要とされる支援について調査するとともに、医療チーム派遣に備えて活動場所の選定に取り掛かりました。そしてJICA本部では、テントや毛布、浄水器など約3000万円相当の緊急援助物資の配給が行われていました。



JDRが活動したレオガン市では8割以上の建物が倒壊

看護師など約900人に、参加可否を問うファックスを一斉送信しました。そして4時間半後、応募者78人の中から24人のメンバーが選ばれ、16日夜、チャーター便で成田空港を出発しました。

一方、現地入りしていた先遣隊は、首都ポルトープランス近郊の都市、レオガン市をチームの活動場所として選んでいました。建物の8割以上が倒壊する深刻な被害を受けながらも、まだ国際的な支援が始まっていなかったからです。そして17日に到着した医療チームと合流、18日朝に診療所を設営し、活動を開始しました。医療チームは8日間で、延べ534人を診療。撤退後は、自衛隊医療部隊にサイトを引き継ぎました。

またJICAは、その後も国連を中心とした復興ニーズ調査に参加。国内でも阪神・淡路大震災の経験を生かしたハイチ復興支援の準備を進めるなど、緊急援助から復興へと続く、継ぎ目のない支援の実現に努めています。